別紙３－２

平成 20 年 3 月 14 日

草の根技術協力事業　モニタリングシート（平成 19 年度第 4 四半期）

※電子データも提出してください。

PDM（なければ案件概要票）からプロジェクト目標、成果、活動を転記する。

1．対象国名・事業名	スリランカ　コットマレー地域の小農民によるアラビカコーヒー栽培のコミュニュティ開発
2．事業実施団体名	特定非営利活動法人日本フェアトレード委員会
3．事業実施期間	平成 19 年 9 月 1 日から平成 22 年 3 月 31 日
プロジェクト目標	コーヒー豆の選別と乾燥・調整に必要な資機材が整い、アラビカ種の生産環境と体制が整う。

成果1	活動実績	特記事項（計画通りにいかなかった理由・問題点・注目点）
活動１－１ スリランカ JICA 専門家会議での幻のスリランカコーヒープレゼンテーション	スリランカ JICA 在外事務所での定例専門家会議において、草の根支援事業としては、初めてのことのようだが、現在のプロジェクト報告「スリランカ　コットマレー地域の小農民によるアラビカコーヒー栽培のコミュニュティ開発」を行った。 報告内容は幻のコーヒー栽培のプレゼンテーションを行った。 ・スリランカは、140 年前は紅茶ではなく、コーヒーが産業だった。 ・「スリランカアラビカコーヒー」の世界で初めての幻のコーヒー試飲会を行った。	活動の広がりは、コットマレーのカウンターパートナーの意識と頑張りが注目される。 以前と違い、こちらの調査に対し、自らも農民や農村の状況を新たに把握始めるなど積極的である。 また、彼らの言葉から、マーケティングなど出てきた。中心になっているカウンターパートナーのバスナヤカさんは、自分でもマーケティングの勉強を始めている。これまで何度となく、日本のコーヒー市場について話したが、その結果だろうが、そのような言葉が出てきたことにはびっくりした。
活動１－２ コーヒー乾燥、調整工場の資機材と生産体制	コーヒー木の赤いコーヒーチェリーを収穫し、脱穀、水洗い、乾燥、選別、梱包、出荷などの工程を通り、ローストされ、ミルして飲むことができるが、現在、工場に関しては、 ・乾燥機、脱穀機（パルパー）選別台など、コーヒー工場のための、基本的な資機材が整ってきた。（**写真添付**）	
活動１－３ コットマレーコミュニティ開発のための調査、研究	コットマレー地域の農村集落状況調査を開始した。調査目的は、基本的な情報を正確にし、報告書として記録を残す。また、その情報をもとに、私たちのＪＩＣＡのプロジェクトのコミュニティ開発を円滑に進めるためのものである。 調査対象は、ラワナゴタ村でコーヒー生産を行っている全農家が対象です。 調査内容は、（**別添資料**）	

		このことの意味するものはこれまではなかった意識だが、物をどのように販売するなどという意識である。つまり、これまではあまり関心がなかった**商品を買う相手、商品の品質、価格**などについての意識形成ができつつあることである。

四半期振り返りコメント（団体）

今回コットマレーの農村状況の調査をはじめたが、すでに、思いのほか現地のコットマレーにおいて調査活動が進んでいた。3 月 3, 4 日と現地調査には、プロジェクトメンバーの宮田喜代志と生山洋一が参加した。中間的報告だが、コットマレーの調査は住民自身、コミュニティ開発を自ら進めるため、現地状況を調査行っていた。

調査資料は、手書きの詳しいものである。

・集落地図
・主要生産物
・労働力構成
・村の歴史のデータ
・自給と商品化の状況
・地形図
・気候図

以上の資料を得た。

コーヒー生産意欲は非常に高まっていると、73 歳の長老からの話があった。コットマレーの女性指導員アジャンタさんより集落地図、主要物、労働力構成、村の歴史のデータレポート。…手書きの詳しいもので感動です。（宮田メールより一部抜粋）

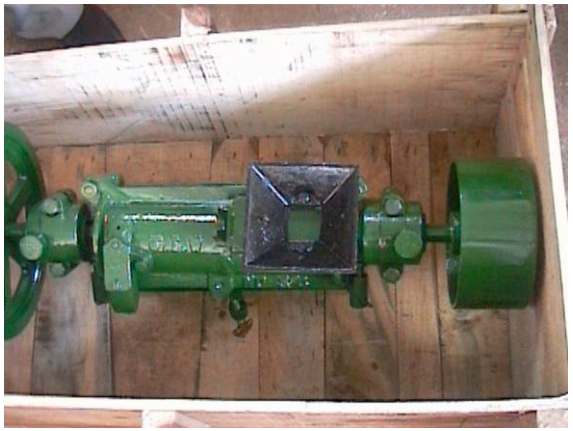
正式な調査報告は、これらをまとめ、整理し当プロジェクトで後日発表したい。

プロジェクトは、目標に向かい進み始めているのを実感している。また私たちのプロジェクトメンバーも、現地駐在員生山と宮田がそれぞれ役割で力を発揮し始めた。また、カウンターパートナーとラヴァナゴダ村の住民は、最初は日本人に合わせる義理立てのようだったが、最近自らの住民の地域や生活を変えるという意識に変わってきた。私たちプロジェクトは住民自身の自らの課題であるという認識を持ってきたようである。

在外コメント	国内機関コメント
本四半期に開始された農村集落状況調査は、本プロジェクトの成功と将来の目標達成に向けて非常に重要な役割を持つと思われる。特に土地問題とコミュニティの成り立ちについては、スリランカでは非常に複雑な状況であるため、詳細な調査・分析が望まれる。調査結果を踏まえて、どのようにしてコミュニティの能力を向上させていくか検討していただきたい。 JICA スリランカ事務所では、毎月専門家会合と称し、JICA 専門家を対象とした連絡会議を開催している。通常、専門家が持ちまわりで事業紹介を行うが、今回初めて草の根技協の関係者による事業紹介・コーヒー試飲会が行われた。専門家、所員にとって非常に好評であり、興味深い内容であった。当地では農業分野専門家も多く活動されているので、上述した農村調査の結果報告など、是非もう一度事業紹介をお願いしたい。	本四半期は乾燥機と脱穀機が揃い、実際にそれら機材を利用して、既存の豆を加工し試飲している。また、豆を各農家から少量ずつ集め、500kg をフェアトレード価格にて試験的に日本に輸出したとの実施団体からの報告があった。これらの活動は、地域住民が当事業の趣旨・到達目標を理解することや、当事業への意識付けに繋がる有意義な活動だと言える。 実際に、カウンターパートとして中心的存在となる数名の者は、マーケティングに関心を持ち自ら学び始めたり、現地状況調査に自主的に取り組んでいる。彼らが中心となって、対象地側の実施体制が整備されることを期待したい。また、日本側もメンバーの役割が明確になり、各自が自身の任務を遂行し始め、事業が軌道に乗り出したようである。

【資料機写真】

乾燥機

乾燥機側面

脱穀機